

健康推進員活動における活動満足感、活動負担感の尺度開発

ムラヤマ ヒロシ* タグチ アツコ ムラシマ サチヨ
村山 洋史* 田口 敦子* 村嶋 幸代*

目的 保健分野の住民組織活動の一つとして、行政養成型ボランティアである健康推進員活動が存在する。本研究では、健康推進員が活動する上で感じる満足感、負担感、すなわち活動満足感、活動負担感の尺度を開発することを目的とした。

方法 対象は、S県A市およびB市で活動する健康推進員604人であった。予備調査として行ったインタビュー結果を参考に、活動満足感10項目、活動負担感14項目を作成し、内容妥当性を確認した上で、2005年9月に郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。

結果 有効回答数は433票（有効回答率71.7%）であった。活動満足感、活動負担感について因子分析を行った結果、活動満足感は「活動愛着」、「自己利益」の2因子9項目、活動負担感は「日常生活負担」、「精神的負担」、「活動量負担」の3因子14項目からなる尺度が得られた。また、多特性・多方法行列を作成し検討した結果、活動満足感尺度においては収束妥当性が、活動負担感尺度においては収束妥当性と弁別妥当性が確認された。活動満足感尺度、活動負担感尺度それぞれの下位尺度ごとのCronbach's α は高く、尺度の信頼性が確認された。さらに、Item-Total 相関分析でも良好な結果が得られた。

考察 健康推進員活動における活動満足感尺度、活動負担感尺度の信頼性および妥当性は概ね確認され、十分に使用可能であると考えられた。

Key words : 健康推進員, 活動満足感, 活動負担感, 尺度開発

1 緒 言

2000年に策定された「健康日本21」の中で、地域住民の主体的な健康づくりには、行政だけでなく住民組織、ボランティア組織、地域の民間企業や団体等の主体的な参加が必要であると指摘されている¹⁾。「健康日本21」を推進する上で重要な役割を果たすことが期待されている保健分野の住民組織活動の一つに、健康推進員活動が存在する。健康推進員（以下、推進員とする）は、行政養成型ボランティア²⁾であり、多くの自治体で保健師や栄養士によって養成、支援されており、地域住民の健康の保持増進を目的に活動している。地域によっては、保健推進員や健康づくり推進員、食生活改善推進員と呼ばれている所もある。

推進員活動をはじめとする住民組織活動に関する先行研究では、メンバーの活動参加に対する意味づけや活動継続の要因などについて、質的に分析した調査^{3~6)}や、実態把握を目的に行った調査⁷⁾が多い。これら先行研究では、活動に参加することにより、充実感や喜びを得ることができ^{3,4)}、自己の存在を確認できる^{4,5)}など、ポジティブな効果がみられるとの報告がある。一方で、報告数は少ないものの、推進員メンバーは、「地域住民からの協力が得られない」や「具体的な活動方法が分からない」と活動に対して感じるものが報告されており^{6,7)}、ネガティブな効果も存在する。この両側面を考慮しながら、行政は活動支援を行うことが重要である^{3,6)}。

活動支援に際しては、推進員活動におけるポジティブな効果、ネガティブな効果に着目し、前者を伸ばし、後者を抑制することが望ましいが、各々について具体的な指標を開発し、その構造を明らかにした研究はみられない。

そこで本研究では、ポジティブな効果、ネガテ

* 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野
連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護学分野 村山洋史

イブな効果をそれぞれ活動満足感、活動負担感として捉え、推進員活動における活動満足感、活動負担感の尺度を開発することを目的とした。

II 方 法

1. 予備調査

活動満足感、活動負担感の項目を作成するにあたり、予備調査として2004年7月～9月および2005年8月にS県A市およびB市に所属する推進員15人（うち14人は推進員組織での役職経験者）、行政の担当者9人を対象に、推進員活動の現状や具体的な支援内容とその効果などについて、インタビューを実施した。インタビューによる予備調査の結果と住民組織活動およびボランティア活動に関する先行研究^{3,4,6~11)}を参考に項目を作成した。各項目は、調査対象地域の推進員2人、住民組織活動支援の経験が豊富な保健師2人、および住民組織活動分野に精通した研究者2人に内容妥当性を確認した。

作成した項目について、2005年8月に調査対象地域の推進員10人と調査対象地域外の推進員8人にプレテストを実施した。その結果をもとにワーディング等の修正を加え、本調査の項目とした。

2. 本調査

1) 調査対象

予備調査と同じS県A市およびB市で活動する推進員のうち、2005年度に活動を休止している9人（A市6人、B市3人）を除く、604人全員（A市512人、B市92人）を対象とした。

A市およびB市の推進員活動は、「私達の健康は私達の手で」をスローガンに、地域における健康づくりリーダーとしてその普及啓発に努め、地域住民の健康の保持増進を積極的に推進することを目的としており、具体的には、地域住民を対象に料理講習会や運動教室などを開催している¹²⁾。推進員として活動するためには、地区の自治会長や区長の推薦を受け、市が主催する「健康推進員養成講座」を修了する必要がある、その後市長の委嘱を受ける¹²⁾。地域のどの地区にも推進員が配置されるように網羅性を重視した組織づくりが行われていることが特徴である¹³⁾。推進員活動は、行政の専門職である保健師、栄養士等により支援されている。これらの専門職は推進員に対して、適宜、推進員活動の内容について相談に乗った

り、健康に関する専門知識等について助言を行ったりしている。また、推進員組織の会議にも出席している。

A市およびB市は、S県の東南部に位置し、互いに隣接している。2005年9月時点の人口は、A市93,734人、B市55,204人であった。A市、B市の推進員組織は、平成16年の合併前は7町からなる郡の組織として活動していた。合併後も、A市、B市の推進員組織は互いに連絡し合って活動している。

2) 調査方法

無記名自記式質問紙調査を郵送法にて実施し、対象者には直接個人宛に調査票を送付した。調査時期は、2005年9月であった。

3. 調査項目

1) 個人属性

性別、年齢、現在住んでいる地区での居住年数、世帯構成、職業、医療・保健・福祉・教育関係の資格の有無を尋ねた。

2) 推進員活動の内容

活動経験年数、3か月間の活動回数、推進員組織での役職経験の有無を尋ねた。

3) 活動満足感、活動負担感

推進員として活動する上で感じる満足感、負担感について、インタビューによる予備調査の結果と先行研究^{3,4,6~11)}を参考に、活動満足感10項目、活動負担感14項目を作成し、「そう思う：4点」から「そう思わない：1点」までの4件法で尋ねた。

また、これらとは別に、活動への全体的満足として「満足である」から「満足でない」、活動への全体的負担として「負担である」から「負担でない」、を4件法でそれぞれ1項目ずつ尋ねた。

4. 分析方法

活動満足感尺度、活動負担感尺度の構成概念妥当性の確認には、因子分析を行い、活動満足感尺度、活動負担感尺度、活動への全体的満足、活動負担感尺度の間のPearsonの積率相関係数を算出し、多特性・多方法行列を作成した。信頼性の確認には、Cronbach's α を算出した。また、項目ごとにItem-Total相関（以下、I-T相関とする）分析を行った。

なお、所属組織（A市、B市）による主要な変数の比較を行ったが、差異がなかったため、あわ

せて分析した。

解析には、SPSS 12.0J for Windows を用い、有意水準は5%（両側）とした。

5. 倫理的配慮

本研究は東京大学医学部研究倫理審査委員会の承認を得て行われた。調査を行うにあたり、S 県 A 市および B 市健康推進連絡協議会と、両市および保健所の推進員担当者に調査の趣旨を説明し、了解を得た。対象者には、調査の趣旨、調査への協力は任意であること、匿名性を保持すること等を記した協力依頼書を調査票に添付した。また、調査票の返送をもって調査への同意とみなした。

III 結 果

調査票の配布数604票のうち、回収数は433票であった。そのすべてを有効回答とし、分析に加えた（有効回答率71.7%）。なお、分析対象は、A 市363票（有効回答率70.9%）、B 市70票（有効回答率76.1%）であった。

1. 対象者の概要

対象者の概要を表1に示す。

対象者はすべて女性であり、平均年齢は54.2±6.7歳、現在住んでいる地区での平均居住年数は29.6±12.8年であった。世帯構成は、「核家族または2世代家族」が45.0%と最も多く、次いで「3世代家族」28.2%、「夫婦のみ」16.2%の順に多かった。職業は、「非常勤」38.1%、「無職」34.2%が多かった。医療・保健・福祉・教育関係の資格を持っている者は21.7%であった。

平均活動経験年数は6.4±5.3年であり、3か月の平均活動回数は7.6±9.0回、現在役職に就いている、または過去に役職に就いた経験のあるものは15.2%であった。

2. 活動満足感、活動負担感項目の得点分布

活動満足感10項目、活動負担感14項目の平均値、標準偏差、度数分布を表2に示す。天井効果、床効果（本研究においては、平均値±標準偏差が4以上もしくは1以下になる項目）を確認したところ、活動満足感の項目「(8)推進員活動を通して、多くの人と知り合える」においてのみ天井効果がみられた。しかし、その程度はわずかであるため、今回は分析に加えた。それ以外の項目では、天井効果、床効果はみられなかった。

表1 対象者の概要

n = 433	
性別	
女	433(100.0)
年齢	54.2± 6.7
居住年数	29.6±12.8
世帯構成	
一人暮らし	4(0.9)
夫婦のみ	70(16.2)
核家族または2世代家族	195(45.0)
3世代家族	122(28.2)
4世代家族	5(1.2)
その他	12(2.8)
職業	
常勤	36(8.3)
非常勤（パート・アルバイト）	165(38.1)
自営業・家族従業員	45(10.4)
農林漁業	12(2.8)
無職（主婦含む）	148(34.2)
その他	2(0.5)
医療・保健・福祉・教育関係の資格	
持っている	94(21.7)
持っていない	310(71.6)

値は n (%) または Mean ± SD, 欠損値は除く

3. 活動満足感尺度、活動負担感尺度の構成概念妥当性の検討

1) 因子構造の確認

活動満足感10項目、活動負担感14項目について因子分析を行った。表3は活動満足感尺度、表4は活動負担感尺度の因子分析の結果である。

活動満足感について、作成した10項目で因子分析を行った結果、「(5)推進員の活動内容に関心が持てる」で複数の因子に0.35以上の因子負荷量が示された。そのため、この項目を除外し、9項目で再度因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、2因子に分かれた。因子1は、「推進員活動が好きである」、「推進員活動に喜びを感じる」、「推進員活動は楽しい」などを含み、活動自体に感じる愛着を表す「活動愛着」（5項目）、因子2は、「推進員活動を通して、自分自身が成長できる」、「推進員活動を通して、学ぶことが多い」、「推進員活動を通して、多くの人と知り合える」などを含み、活動により自己に与えられる利益を表す「自己利益」（4項目）と名付けた。活動満足感として以上2因子が抽出され、これら

表2 活動満足感、活動負担感項目の得点分布

n = 433

	Mean ± SD	そう思う	まあそう思う	あまりそう 思わない	そう思わない
活動満足感					
(1) 推進員活動は楽しい	2.63 ± 0.76	47(10.9)	202(46.7)	148(34.2)	27(6.2)
(2) 推進員活動が好きである	2.50 ± 0.79	40(9.2)	172(39.7)	173(40.0)	40(9.2)
(3) 推進員活動に喜びを感じる	2.49 ± 0.76	35(8.1)	172(39.7)	185(42.7)	34(7.9)
(4) 推進員活動はやりがいがある	2.69 ± 0.75	50(11.5)	217(50.1)	134(30.9)	23(5.3)
(5) 推進員の活動内容に関心が持てる	2.76 ± 0.73	53(12.2)	238(55.0)	110(25.4)	22(5.1)
(6) 推進員活動を通して、学ぶことが多い	3.28 ± 0.68	163(37.6)	227(52.4)	25(5.8)	10(2.3)
(7) 推進員活動を通して、自分自身が成長できる	3.20 ± 0.71	150(34.6)	218(50.3)	51(11.8)	7(1.6)
(8) 推進員活動を通して、多くの人と知り合える	3.35 ± 0.65	188(43.4)	206(47.6)	27(6.2)	5(1.2)
(9) 推進員活動の経験は、自分にとって有意義なものである	3.14 ± 0.73	139(32.1)	213(49.2)	65(15.0)	7(1.6)
(10) 推進員活動をこれからも継続していきたい	2.48 ± 0.93	59(13.6)	157(36.3)	136(31.4)	71(16.4)
活動負担感					
(1) 推進員活動の仕事量が多い	2.45 ± 0.79	50(11.5)	120(27.7)	221(51.0)	30(6.9)
(2) 推進員活動は体力的にきつい	1.91 ± 0.65	7(1.6)	49(11.3)	266(61.4)	103(23.8)
(3) 推進員活動をすると、精神的に疲れてしまう	2.24 ± 0.82	33(7.6)	106(24.5)	218(50.3)	69(15.9)
(4) 推進員の活動内容が難しい	2.13 ± 0.75	20(4.6)	89(20.6)	242(55.9)	74(17.1)
(5) 推進員の活動内容に興味が持てない	2.06 ± 0.74	17(3.9)	79(18.2)	242(55.9)	86(19.9)
(6) 地域住民への働きかけが難しい	2.98 ± 0.84	122(28.2)	200(46.2)	79(18.2)	25(5.8)
(7) 推進員としての責任が重い	2.55 ± 0.76	47(10.9)	163(37.6)	190(43.9)	24(5.5)
(8) 推進員組織内の人間関係が難しい	2.15 ± 0.78	31(7.2)	72(16.6)	253(58.4)	69(15.9)
(9) 推進員活動は忙しい	2.29 ± 0.73	23(5.3)	121(27.9)	235(54.3)	45(10.4)
(10) 推進員活動のために、時間に追われる	2.20 ± 0.76	27(6.2)	93(21.5)	243(56.1)	61(14.1)
(11) 推進員活動のために、家事、買い物、仕事などに支障がある	2.14 ± 0.84	32(7.4)	88(20.3)	214(49.4)	91(21.0)
(12) 推進員活動のために、自分の趣味や他の地域活動をする時間がない	1.91 ± 0.69	12(2.8)	48(11.1)	257(59.4)	109(25.2)
(13) 推進員活動にかかる出費を負担に感じる	1.79 ± 0.73	13(3.0)	39(9.0)	221(51.0)	154(35.6)
(14) 推進員活動をすることで、家族に迷惑をかけることがある	2.11 ± 0.85	26(6.0)	99(22.9)	194(44.8)	106(24.5)

値は Mean ± SD または n (%), 欠損値は除く

Mean および SD は、「そう思う：4点」から「そう思わない：1点」で換算した

下位尺度それぞれの合計得点で活動満足感の各側面を測定することとした。

次に、活動負担感について、14項目で因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、3因子に分かれた。因子1は、「推進員活動のために、家事、買い物、仕事などに支障がある」、推進員活動のために、自分の趣味や他の地域活動をする時間がない」、推進員活動のために、時間に追われる」などを含み、活動に伴う日常生活

への負担を表す「日常生活負担」(5項目)、因子2は、「推進員の活動内容が難しい」、地域住民への働きかけが難しい」、推進員組織内の人間関係が難しい」などを含み、活動に感じる精神的負担を表す「精神的負担」(6項目)、因子3は、「推進員活動の仕事量が多い」、推進員活動は忙しい」、推進員活動は体力的にきつい」を含み、活動量に関する負担を表す「活動量負担」(3項目)と名付けた。活動負担感として以上3因子が

表3 活動満足感項目の因子分析

	因子 1	因子 2	
因子 1：活動愛着			
(2) 推進員活動が好きである	0.955	-0.092	
(3) 推進員活動に喜びを感じる	0.839	0.006	
(1) 推進員活動は楽しい	0.789	0.000	
(10) 推進員活動をこれからも継続していきたい	0.559	0.247	
(4) 推進員活動はやりがいがある	0.532	0.227	
因子 2：自己利益			
(7) 推進員活動を通して、自分自身が成長できる	0.007	0.875	
(6) 推進員活動を通して、学ぶことが多い	-0.008	0.828	
(8) 推進員活動を通して、多くの人と知り合える	-0.039	0.774	
(9) 推進員活動の経験は、自分にとって有意義なものである	0.192	0.701	
主因子法、プロマックス回転	因子間相関	I	II
因子負荷量0.35以上を太字で表記	I	—	0.706
	II		—

表4 活動負担感項目の因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	
因子 1：日常生活負担				
(11) 推進員活動のために、家事、買い物、仕事などに支障がある	0.836	0.047	-0.057	
(12) 推進員活動のために、自分の趣味や他の地域活動をする時間がない	0.730	-0.008	0.086	
(10) 推進員活動のために、時間に追われる	0.671	-0.018	0.220	
(14) 推進員活動をすることで、家族に迷惑をかけることがある	0.633	0.021	-0.001	
(13) 推進員活動にかかる出費を負担に感じる	0.578	-0.031	-0.008	
因子 2：精神的負担				
(4) 推進員の活動内容が難しい	-0.148	0.591	0.204	
(6) 地域住民への働きかけが難しい	-0.024	0.566	-0.139	
(8) 推進員組織内の人間関係が難しい	0.188	0.554	-0.124	
(7) 推進員としての責任が重い	-0.186	0.523	0.311	
(5) 推進員の活動内容に興味を持ってない	0.227	0.523	-0.127	
(3) 推進員活動をすると、精神的に疲れてしまう	0.147	0.477	0.219	
因子 3：活動量負担				
(1) 推進員活動の仕事量が多い	0.061	-0.126	0.856	
(9) 推進員活動は忙しい	0.260	-0.045	0.651	
(2) 推進員活動は体力的にきつい	0.033	0.191	0.373	
主因子法、プロマックス回転	因子間相関	I	II	III
因子負荷量0.35以上を太字で表記	I	—	0.567	0.694
	II		—	0.625
	III			—

抽出され、これら下位尺度それぞれの合計得点で活動負担感の各側面を測定することとした。

表5に、活動満足感尺度、活動負担感尺度のそれぞれの下位尺度の項目数、下位尺度合計得点の得点範囲、および平均値と標準偏差、下位尺度合

計得点を項目数で割った際の平均値と標準偏差を示す。

2) 収束妥当性、弁別妥当性の検討

活動満足感尺度、活動負担感尺度、活動への全体的満足、活動への全体的負担の間の相関係数を

求め、多特性・多方法行列を作成し、構成概念妥当性の一つである収束妥当性と弁別妥当性を検討した。多特性・多方法行列を表6に示す。方法は異なっても同一の特性を測定している（同一特性・異測定法）もの同士の相関が強い場合、収束妥当性があると判断する¹⁴⁾。また、この同一特性・異測定法による相関が、特性は異なっても同一の方法で測定している（異特性・同一測定法）もの同士の相関、および特性も測定方法も異なる（異特性・異測定法）もの同士の相関よりも強い場合、弁別妥当性があると判断する¹⁴⁾。本研究では、同一特性・異測定法を「活動満足感尺度と活動への全体的満足」および「活動負担感尺度と活動への全体的負担」、異特性・同一測定法を「活動満足感尺度と活動負担感尺度」、異特性・異測定法を「活動満足感尺度と活動への全体的負担」および「活動負担感尺度と活動への全体的満足」

とした。

活動満足感尺度の下位尺度と活動への全体的満足との間の相関係数は、「活動愛着」 $r=0.421$ 、「自己利益」 $r=0.338$ であり、活動負担感尺度の下位尺度と活動への全体的負担との間の相関係数は、「日常生活負担」 $r=0.488$ 、「精神的負担」 $r=0.522$ 、「活動量負担」 $r=0.534$ であった。また、活動満足感尺度の下位尺度と活動負担感尺度の下位尺度との間の相関係数は、 $r=-0.227\sim-0.503$ であった。さらに、活動満足感尺度の下位尺度と活動への全体的負担との間の相関係数は、「活動愛着」 $r=-0.528$ 、「自己利益」 $r=-0.424$ であり、活動負担感尺度の下位尺度と活動への全体的満足との間の相関係数は、「日常生活負担」 $r=-0.167$ 、「精神的負担」 $r=-0.201$ 、「活動量負担」 $r=-0.095$ であった。

4. 活動満足感尺度、活動負担感尺度の信頼性の検討

活動満足感尺度、活動負担感尺度のそれぞれの下位尺度について、内的整合性を確認するため、Cronbach's α を算出した。

活動満足感尺度では、「活動愛着」 $\alpha=0.888$ 、「自己利益」 $\alpha=0.890$ であった。また、活動負担感尺度では、「日常生活負担」 $\alpha=0.843$ 、「精神的負担」 $\alpha=0.758$ 、「活動量負担」 $\alpha=0.738$ であった。

さらに、項目を除外した際、その項目が含まれていた下位尺度の α を算出した。その結果、活動負担感尺度の下位尺度「活動量負担」の項目である「(2)推進員活動は体力的にきつい」のみで、

表5 活動満足感尺度、活動負担感尺度の下位尺度得点

項目数	合計得点		合計得点/ 項目数
	得点 範囲	Mean±SD	Mean±SD
活動満足感尺度			
活動愛着	5	5-20	12.8±3.3
自己利益	4	4-16	13.0±2.4
活動負担感尺度			
日常生活負担	5	5-20	10.2±3.0
精神的負担	6	6-24	14.1±3.2
活動量負担	3	3-12	6.6±1.8

表6 活動満足感尺度、活動負担感尺度における多特性・多方法行列

	活動満足感尺度		活動負担感尺度			活動への 全体的満足	活動への 全体的負担
	活動愛着	自己利益	日常 生活負担	精神的負担	活動量負担		
活動満足感尺度							
活動愛着							
自己利益		0.699					
活動負担感尺度							
日常生活負担	-0.245 ^{b)}	-0.243 ^{b)}					
精神的負担	-0.503 ^{b)}	-0.340 ^{b)}	0.523				
活動量負担	-0.303 ^{b)}	-0.227 ^{b)}	0.665	0.549			
活動への全体的満足	0.421 ^{a)}	0.338 ^{a)}	-0.167 ^{c)}	-0.201 ^{c)}	-0.095 ^{c)}		
活動への全体的負担	-0.528 ^{c)}	-0.424 ^{c)}	0.448 ^{a)}	0.522 ^{a)}	0.534 ^{a)}	-0.369	

a) 同一特性・異測定法, b) 異特性・同一測定法, c) 異特性・異測定法

その項目を除いた場合の α が、項目すべてを含んだ際の「活動量負担」の α である0.738を超える0.803という値をとったが、それ以外の項目では下位尺度の α を超えるものはみられなかった。

5. Item-Total 相関分析

活動満足感尺度、活動負担感尺度のそれぞれの項目ごとに、その項目と、その項目を除外した下位尺度得点との間の相関係数を算出した。

活動満足感の下位尺度のI-T相関は、「活動愛着」で $r=0.657\sim 0.809$ 、「自己利益」で $r=0.700\sim 0.807$ であった。また、活動負担感の下位尺度では、「日常生活負担」で $r=0.537\sim 0.712$ 、「精神的負担」で $r=0.389\sim 0.573$ 、「活動量負担」で $r=0.417\sim 0.650$ （なお、「(2)推進員活動は体力的にきつい」は $r=0.417$ ）であった。

IV 考 察

1. 活動満足感尺度、活動負担感尺度の信頼性および妥当性

本研究では、推進員の持つ活動満足感と活動負担感に注目し、その尺度を開発した。

活動満足感尺度に類似するものとして、米国などではボランティア活動における活動満足感の尺度作成が試みられている^{8~11)}。日本では、ボランティア活動や地域活動における満足感を測定した研究はいくつかみられる^{15,16)}ものの、それを尺度化したものはみられない。一方、活動負担感については、ボランティア活動や地域活動において、これを取り上げて測定した研究はみられず、尺度作成は試みられていない。しかし、質的研究や実態調査^{6,7)}などでは、推進員メンバーは活動に対して負担に感じる面もあると報告されており、活動負担感を取り上げる意義は大きいと考えられる。

尺度作成に伴い、推進員と行政支援者である保健師および栄養士にインタビューを行い、推進員が普段の活動の中でどのようなことに満足を得、負担を感じているかを明らかにした。その結果をもとに項目を作成し、推進員、住民組織活動支援の経験豊富な保健師、および住民組織活動に精通した研究者の意見を参考に修正を行った。本研究では、以上のような手順で内容妥当性の担保を図った。

因子分析の結果、活動満足感尺度は「活動愛着」、「自己利益」の2因子に、活動負担感尺度は

「日常生活負担」、「精神的負担」、「活動量負担」の3因子に分かれた。また、多特性・多方法行列を作成した結果、活動満足感尺度、活動負担感尺度において、同一特性・異測定法による相関が中程度認められ、ともに収束妥当性が確認された。弁別妥当性に関しては、活動負担感尺度では確認できたものの、活動満足感尺度では、同一特性・異測定法による相関が、異特性・同一測定法、異特性・異測定法による相関よりも必ずしも強くなかったため確認できなかった。その理由として、活動満足感尺度、活動負担感尺度に対する異測定法として用いた活動への全体的満足、活動への全体的負担の各項目が、必ずしも活動満足感、活動負担感の各側面を測定しきれていない可能性が考えられる。そのため、活動満足感尺度の弁別妥当性の検討は今後の課題といえる。とはいえ、活動満足感尺度、活動負担感尺度間にはリーズナブルな正負の関係が示されていることも併せて考えると、構成概念妥当性の一部は確認できたといえる。

さらに、内的整合性は、活動満足感尺度、活動負担感尺度のいずれの下位尺度においても $\alpha=0.738\sim 0.890$ であり、十分な内的整合性を有しているといえる。

2. 実践への活用可能性

今回は、推進員が持つ活動満足感、活動負担感を取り上げ、活動満足感9項目、活動負担感14項目からなる尺度を開発した。推進員の感じる満足感、負担感、行政が活動支援を行う際に注目すべき視点である。この尺度を用いることによって、推進員が現在の活動に対し、どの程度満足し、負担と感じているかを簡便に測定し、得点という形で把握できる。また、活動支援の方法を検討し、その効果を評価する際に役立つものと考えられる。

3. 本研究の課題と意義

まず、尺度開発に関して、先にも述べたが、収束妥当性、弁別妥当性の確認の際に使用した活動への全体的満足、活動への全体的負担の項目は、それぞれ1項目のみで満足感、負担感を尋ねるものであり、必ずしも活動満足感、活動負担感を測定しきれていない可能性がある。尺度の妥当性については、更に検討を進めていく必要がある。

また、活動負担感尺度の下位尺度「活動量負担」の項目の一つである「(2)推進員活動は体力的にき

ついで」において、項目除外時の α が、その項目を含んだ際の下位尺度の α の値を超えていた。今回は、 α の値がそれ程大きくは超えていない点、当該項目のI-T相関が0.417と十分に高い点、尺度項目の内容妥当性は高いと考えられる点などから、この項目を尺度に含めても問題ないと判断した。しかし、この項目が下位尺度内の他の2項目と異なる概念を測定している可能性は否定できない。さらに、予備調査として行ったインタビューへの協力者は、15人中14人が推進員組織で役職を経験したことがあり、推進員の中でも活動に熱心であり、同時に活動による負荷が多くかかった協力者が含まれていると考えられる。以上の点を踏まえ、今後、さらなる項目検討の必要性があるといえる。

研究全体に関しては、対象地域、対象組織が限局されている点が挙げられる。本対象は健康推進員であったが、地域によっては、類似した活動を行っていても、名称や規模などの組織特性が異なっている活動は多く存在する。今後は、地域特性、組織特性の異なる対象について調査、検討することが必要であろう。

本研究の意義として、推進員が活動に感じる満足感、負担感についての尺度を開発し、推進員活動の支援方法やその効果を検討する際の指標を提示した点が挙げられる。今後、本研究で明らかになった活動満足感尺度、活動負担感尺度への関連要因を検討することで、具体的な活動支援の方策を探ることが可能になると考えられる。

また、本研究は、これまで少なかった住民組織活動における実証研究の糸口となることが期待される。

V 結 語

健康推進員が活動する上で感じる満足感、負担感、すなわち活動満足感、活動負担感に注目し、尺度を開発した。その結果、活動満足感は「活動愛着」、「自己利益」の2因子9項目、活動負担感は「日常生活負担」、「精神的負担」、「活動量負担」の3因子14項目からなる尺度が得られ、信頼性および妥当性が概ね確認された。尺度項目と尺度の妥当性の更なる検討、地域特性、組織特性の異なる対象での検証が必要という課題は残されているものの、本尺度は十分に使用可能であると考えら

れた。

(受付 2006. 3.10)
(採用 2006.11.24)

文 献

- 1) 星 旦二, 藤原佳典. 「健康日本21」地方計画のめざすもの. 保健婦雑誌 2000; 56(5): 365-370.
- 2) 大江 浩, 石川 宏. 健康増進における住民ボランティア活動—行政養成型ボランティアの意義と課題—. 公衆衛生 1992; 56(1): 58-62.
- 3) 星野明子, 成木弘子, 飯田澄美子. F市保健推進員活動における参加者の活動体験とその意味. 聖路加看護学会誌 1999; 3(1): 48-53.
- 4) 成木弘子, 飯田澄美子. コミュニティ・ケアを目的とした自主組織活動への参加を継続する要因—都市における事例研究—. 日本健康教育学会誌 2003; 11(2): 93-103.
- 5) 秋山さちこ, 海老真由美, 村山正子. 住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造. 日本地域看護学会誌 2004; 7(1): 35-40.
- 6) 織田初江, 長沼理恵, 長田久子, 他. 住民の主体的参加を促す地域看護活動に関する一考察—保健推進員の活動意欲に影響する要因—. 金沢大学医学部保健学科紀要 2001; 24(2): 171-175.
- 7) 高橋香子, 斎藤美華, 安齋由貴子, 他. 市町村における健康推進員の役割認識と活動内容に関する検討. 宮城大学看護学部紀要 2002; 5(1): 95-101.
- 8) Omoto AM, Snyder M, Martino SC. Volunteerism and the life course: Investigating age-related agendas for action. *Basic and Applied Social Psychology* 2000; 22(3): 181-197.
- 9) Galindo-Kuhn R, Guzley RM. The Volunteer Satisfaction Index: Construct definition, measurement, development, and validation. *Journal of Social Service Research* 2001; 28(1): 45-68.
- 10) Omoto AM, Snyder M. Sustained helping without obligation: Motivation, longevity of service, and perceived attitude change among AIDS volunteers. *Journal of Personality and Social Psychology* 1995; 68(4): 671-686.
- 11) Clary EG, Snyder M, Ridge RD, et al. Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 1998; 74(6): 1516-1530.
- 12) 滋賀県健康福祉部健康対策課. いきいきのびのび健康づくり—健康推進員ハンドブック—. 滋賀: 滋賀県健康福祉部健康対策課, 1990; 1-15.
- 13) 齊藤 進. 地域組織活動をどう強化・活性化させるか—調査結果から行政支援のあり方を考える—. 生活教育 2001; 45(8): 27-31.

- 14) Campbell DT, Fiske DW. Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin* 1959; 56(2): 81-105.
- 15) 星野明子, 桂 敏樹, 成木弘子. 地方都市における地域組織活動の効果に関する研究. *日本農村医学会雑誌* 2000; 49(1): 21-29.
- 16) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫. 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性. *東京保健科学学会誌* 2004; 7(1): 17-24.

DEVELOPMENT OF SATISFACTION AND BURDEN SCALES FOR COMMUNITY ACTIVITIES OF HEALTH PROMOTION VOLUNTEERS

Hiroshi MURAYAMA*, Atsuko TAGUCHI*, and Sachiyo MURASHIMA*

Key words : health promotion volunteer, satisfaction, burden, scale development

Purpose Health promotion volunteers (HPVs) who are members of community health organizations are being fostered by local governments to work in local communities in Japan. The purpose of this study was to develop Satisfaction and Burden Scales for HPVs in their community activities.

Methods The subjects were 604 HPVs in two cities in a prefecture. Based on the findings of preliminary interviews, ten items for the Satisfaction Scale and fourteen items for the Burden Scale were prepared, and their content validities were confirmed. A mail-in self-check questionnaire survey was conducted in September 2005.

Results A total of 433 questionnaires were analyzed (valid response rate: 71.7%). Two factors and nine items for the Satisfaction Scale and three factors and fourteen items for the Burden Scale were obtained based on factor analysis. Convergent validities of both scales and discriminant validity of the Burden Scale were supported by the results of the multitrait-multimethod matrix for Satisfaction and Burden Scales, and one item each for general satisfaction and general burden regarding their activities. The reliabilities of both scales were confirmed with reference to the Cronbach's alpha coefficient. Moreover, all item-total correlations were moderately or strongly positive.

Conclusion This study provided support for the reliability and the validity of Satisfaction and Burden Scales for HPVs in their community activities. The applicability of both scales is suggested.

* Department of Community Health Nursing, Division of Health Sciences and Nursing, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo, Japan